

序言

内村先生⁽¹⁾のなされた偉いことの一つは真理としてのキリスト教の確立である。キリスト教は真理なるが故に信ずる。真理とキリスト教と、どちらを取るかと言えば真理をとると言うのである。罪の赦しの十字架の福音⁽²⁾は宇宙最高の真理である、というのが内村先生の信仰である。ほんとの学問をすればキリスト教の信仰に到らざるを得ないというものである。私も内村先生の驥尾に付して⁽³⁾、このことを確かにしようと努力して来た。また真理の探究、即ちほんとの学問はキリスト教の信仰がなければ出来ない。信仰がなければ金儲けのための学問になってしまう。立身出世のためというのも、学者的名声を博したいというのも金儲けに他ならない。今日の日本の学問が低調なのはこのためである。アストロロジー⁽⁴⁾は占星術と訳されて居るが、本来は立派な星の学問を意味する語である。これが金儲けに用いられたので占星術に墮落したのである。信仰がなければほんとの学問は出来ない。

この書が世に出るようになったのは小関充⁽⁵⁾兄⁽⁶⁾の主に在る愛による。小関兄が多忙の中にあって時間を割き、非常な努力をして、発表された私の文章を集め、整理し一書にまとめ上げて下さった。また独立学園の職員諸兄、特に助川暢兄⁽⁷⁾が中心になって、原稿の整理に当たって下さって感謝にたえない。この書の名を「真理と信仰」とすることも諸兄が作業をしている間に自然に決まった。真理とか信仰とかいう語が度々出て来るからであろう。

終わりに、企画、編集、印刷その他いろいろ御世話下さった日暮勝英先生⁽⁸⁾、柳沢よしね先生⁽⁹⁾に深く感謝する。

1979年9月

鈴木 彌美



著者近影（1984年）

表紙題字・著者